

# 東方幻夢録

Gorgom13

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神や妖怪、魔物が跋扈する幻想郷――。

外の世界から忘れ去られた理想郷に住まう者達の、少し緩くて、たまにシリアスな物語。

# 目次

霊々夢 (一)	1
霊々夢 (二)	7
霊々夢 (三) (追加エピソード挿入済)	13
霊々夢 (四)	20
霊々夢 (五)	26
霊々夢 (終)	31
メイド長の午後のひと時	38
人と魔の狭間で	44
Locked Girls / ヴワル魔法	49
図書館	57
ミスティア・ローレライの告白	—



## 靈々夢 (一)

幻想郷を外界から隔絶する博麗大結界の中核、博麗山の頂上には「博麗神社」という小さな社が鎮座している。この神社に奉仕する代々の博麗の巫女によって、幻想郷は人間社会の広がる外の世界から隠されてきた。

博麗神社に行くには、山の頂に至る長い長い石階段を上る必要がある。大人の足で、休みなしに上つても三時間はかかる上に、麓は妖怪の跋扈する森が広がっているとあっては、人里の人間が近づかないのは寧ろ必然とも言えた。

おかげで賽銭箱はいつも空——でもおかしくはないのだが、そこはそれ、時折魔法使いや人間慣れした妖怪の助けでここまで訪れる物好きもいるおかげで、少しの稼ぎにはなっている。

とは言え、不定期な人間の訪問者を当てにしているといつ飢え死にしてもおかしくない程度には貧しかったので、博麗の巫女はこの幻想郷を作り上げた大妖怪・八雲紫から齎される依頼を受けることで糊口を凌ぐのが常であった。

今しも博麗神社の軒先で、中空を切り裂くように隙間が開いた。空間の裂け目のその奥からは、金髪を結い上げた色白の女性が上体を乗り出し、巫女の居住する神社脇の小

屋を覗き込んでゐる。彼女こそ八雲紫その人である（人ではないが）。

「霊夢……………?」

現博麗の巫女に呼び掛けても返事がないのを不審に思い、紫は裂け目から出て小屋の縁側からもう一度呼びかけた。いつもなら、霊夢はここでお茶を飲んだり、拜殿の掃除をしたりしている時間なのだが。

やがて、小屋の奥から布団を体に巻き付けた霊夢が現れた。

「紫? 何か用?」

「ご挨拶ね、霊夢。せっかく稼ぎになる仕事を紹介しようと思つてやつて来たのに……………」

「ああ、仕事ね、仕事…………。それ、すぐやらなくちゃならない?」

酷く気怠そうな霊夢を見て、紫は「上がるわよ」と言つて返事も待たず居間に上り込むと、霊夢の額に掌を当てた。

「どれ…………熱はないようだけど…………体調が悪いの?」

「ああ、もう……………」

霊夢は内心どぎまぎしながら、紫の白い手をやんわり振り払う。

紫は妖であるにも関わらず、人の追い求める究極の美を体現するような容姿をしている。女である霊夢から見ても、鼻梁の通つたすつきりした顔に、紫水晶の如き両の瞳。

西洋人かと思紛うばかりのブロンド、そしてひんやりとした、白磁のように透き通るような肌——。腕利きの職人が金に糸目をつけず究極のビスクドールを作れば、紫のようになるのではないかと霊夢は思う。

その彼女はしよつちゆう、美術品のようなその手を惜しげもなく差し出して霊夢に触れようとする。霊夢とて、本心では紫に触れられるのは嫌ではない。それどころか、密かに喜んですらいた。どの程度の好意を紫に抱いているのかは、自分でも測りかねているが。

だが、妖怪と人間のバランスを保つのは博麗の巫女として重要な仕事の一つである。人と妖怪の間には超えてはならない一線があり、特に博麗の巫女は妖怪に感情移入してはならないという不文律がある。そんな訳で、霊夢は半ば無意識に紫への密かな思いを否定したくて、つい邪険に応じてしまうのだ。

「大丈夫だから。最近天候が不安定でしょ。少し暖かくなったと思って薄着で寝たら、少し寝冷えしてしまっただけよ」

「そう？ それならいいけれど」

霊夢の複雑な心中を知ってか知らずか、この見た目二十歳前後の年齢不詳妖怪は怒ることもなくあつさりと引き下がる。自称十七歳だが、そんな訳あるか!! と皆が思っているのは口に出さない。

「それで？ 仕事って？」

「人里にね、妙な妖怪が出るらしいのよ」

「妙な妖怪？ まあ良いわ。お茶を淹れるから、そこに座ってて」

靈夢の淹れた出廻らしの、殆ど白湯のようなお茶を飲みながら紫は説明した。

それが目撃されたのはつい三日前のこと。とある酒屋の店主が店じまいをしていたところ、「酒をくれ〜」という声が聞こえたのだそう。

板戸を開くと、誰もいない。だが、背後でちやりんと音がするので振り返れば、そこには銅貨が落ちていて、その分の酒がなくなっているのだそう。

「それがね、三日続いて起こったらしいのよ」

「お金払ってるんでしょ。いい妖怪じゃない」

「そうは言ってもね、いつも店じまいをした後に来られるもんだから、昨日店主が板戸越しに『いい加減にしてくれ』って断ったららしいのよ。すると板戸が叩き壊されて、またしてもお酒が消えていたそうよ」

「壊された？ 姿は見なかったの？」

「それが一瞬の出来事で、黒い竜巻のようなものが吹き抜けたと思ったら、すぐに外に出て行ったそうよ。酒代は勿論、板戸の修理代まで置いていったらしいわ」

「……………う〜ん、実害は板戸だけかあ……………でも店主としては、気味が悪いでしょうね」



「率直に言つて怖がつているわ。それに妖怪が買い取つた酒は、杜氏から直接に買い受けた特上品らしいわ。私も時折藍に買いに行かせているお酒だから、放つておけなくて」

「……………（結局、自分好みのお酒が飲めなくなるのが嫌なだけでしょ）」

「なあに、霊夢？　まるで『自分好みのお酒が飲めなくなるのが嫌なだけでしょ』つて思っているような顔をしているわ」

「そ、そ、そんなことないわよ!!　分かった。私が今夜張つて、とつ捕まえてやるわ!!」  
「そう？　お願いね」

紫は微笑むと、すぐに隙間の向こうに消えてしまった。

（酒を好む妖怪、ねえ……多過ぎて特定できないわ）

そこまで考えて、ふと伊吹萃香の姿がちょうど三日前から見えないことに気が付いた。

（まさか、萃香じゃないわよね……人里でこんなちんけな異変を起こすとは思えないけど……）

霊夢がそんなことを思いながら身支度を整え、表に出た時である。

「れ、霊夢……」

いた。

伊吹萃香その人（じゃなくて鬼）が、酒瓶を片手に赤らんだ顔で近づいてきた。ろれつのみわらない舌で、酒臭い息を吐きながら萃香は

「ああ、やつと着いたくくヒック……」

そんなことをぼやき、縁側に腰を下ろした。

「聞いてよ、靈夢、勇儀の奴がさくく」

聞けば、星熊勇儀と水橋パルスイの痴話喧嘩の仲裁に三日三晩かかったのだとか。当然この三日間は地底にいたらしい。

「おかげで酒を飲む暇も無くてさ、ストレス溜まりまくりだよくく」

ということは、萃香、勇儀、パルスイは疑いが晴れることになる。まあ、元々犯人候補としての序列は低いので余り意味はないのだが。

「萃香、悪いけど今日は用事があるから、飲み会はその後だね」

「ええくく」

「終わったら付き合っただけだから、ここで待つてなさい」

萃香の抗議の声を受け流し、靈夢は人里に飛んだ。そう、文字通りの一つ飛びだった。

## 靈々夢 (一一)

問題の酒屋は、人里の西側にあつた。飲酒に年齢制限などない幻想郷にあつて、靈夢も時折利用する店であつた。靈夢の場合は自ら嗜むだけではなく、祭事に御神酒を奉納する必要もあるので、それなりに値が張る酒を買うこともままある。それだけに、酒屋からすれば彼女は得意客の一人でもあつた。

「ご主人、いますか〜?」

午後も半ばを過ぎて、そろそろ開業する時刻に靈夢はそこだけ真新しい戸板を叩いて声を掛けた。

「ああ、巫女の嬢ちゃん、これは有難い」

顔を出した店主はほつとしたように彼女を店の中に案内した。店内は極めてシンプルな構造で、両端に酒瓶を並べた棚が、真ん中には干物などの積みが積まれている。戸板の半分だけを開けた状態なので、店内の片側は日の光が入らずに薄暗い。

「紫から話は聞いているけど、改めて説明お願いできる?」

「おやすい御用で」

靈夢のことをいつも巫女の嬢ちゃんと呼ぶ店の主人は、四十代も半ばに差し掛かった

妻子持ちである。妙な噂が界限で広がったら家族が飢えかねないのを霊夢も分かっている。割と真剣に話を聞いた。ご主人の話は大筋において紫の話した通りである。だが、ご主人がそう言えば、と付け足した。

「やっこさんが出ていくとき、鈴の音がしやしたね」

「鈴？」

「ええ、ごく普通の、鈴の音がどこからか聞こえてきやした」

うーん、と唸った霊夢は、少し考えこんだ。そもそも鈴というのは魔除けの意味もあるのだ。そんなものを妖怪が身に着けるだろうか？ いやしかし、と同時に思う。ここは幻想郷だ。常識に囚われてはいけない。

「ちよつと聞いたことないかな。今夜張り込むから、家族と奥に控えてて」

「わかりやした」

「じゃあ、また夜にね」

そう言い残して、霊夢は酒屋を後にする。

夏場は農家として働き、冬に酒造りをするのが杜氏の常である。春には造りたての酒が店の棚に並ぶ。だから酒屋がどうなろうと杜氏の酒が尽きない限り、人里に卸される酒はどこかで入手できるのだ。

とは言っても、仮にその酒屋が妖怪に襲われて店じまいをしたらどうなるか。他の酒

屋も同じ妖怪に襲われ始め、ついには人里中の酒屋が廃業に追い込まれることもありうる。このような異変は火種が小さいうちに解決するに限るのだ。

霊夢は人里の酒屋、居酒屋、卸問屋を一通り巡ってから、ほかの場所には妖怪が現れていないことを確認した。このまま夜まで人里をぶらついて待機してもいいのだが、店主の店じまいまでまだ二、三刻ある。これだけの時間があれば、調べものもできよう。

さて、幻想郷の妖怪に詳しいと言えば稗田阿求。……彼女は風聞録を記録するためか、幻想郷中を歩きまわっていて捕まらないことも多いのだが、まずは訪ねてみよう。

稗田家は幻想郷でも指折りの名家である。代々の稗田阿礼の転生によって、その蔵書も財産も使用人も次々と増えていったようだ。貧乏巫女の霊夢としてはうらやまげしか……こほん。

「すみませくん、霊夢ですけど〜、阿求はいますか〜?」

突然の霊夢の訪問は珍しくもないので、立派な構えの門の向こうからその声が聞こえてきたとき、使用人は大して手間もかけさせずに霊夢を中に通した。

「主は自室で何やら認めておいでです。少々お待ちください」

広大な枯山水の庭園を望む客間に案内され、香り豊かな緑茶を味わっていると、少し経ってから阿求が姿を現した。

「久方ぶり……でもないけれど、元気にしていた?」

対面に腰を下した阿求は、作業で疲れ気味なのか肩を叩きながら靈夢に話しかける。

「元氣よ。ごめん、仕事中だった？」

「まあ、いつもの執筆活動だから。時間はいくらでも調整できるわ。最近は何新しい異変も妖怪も昔より減ったしね」

これで減ったの?!? という靈夢の内心の驚きはすぐに阿求に伝わったらしい。靈夢の顔を見てくすくす笑いながら、

「あんたたち博麗の巫女のお陰でしょ……それより、今日はどうしたの？」

「あ、ああ、そうそう。異変……というほどじゃないけどね」

靈夢の説明を黙って聞いていた阿求は、少しの間考え込んでいた。腕を組んで両目を閉じ、何事かを思い出そうとしていたが、突然「あつ」と叫んで靈夢に付いて来るように言った。

阿求に連れられて、靈夢は稗田家の膨大な資料を保管している、幾つもの倉が立ち並ぶ中庭にいた。

「ええと、どこだったかしら」

阿求が歩きながら呟いている。この全部に代々の稗田阿礼が書き記した古文書やかき集めた歴史資料が蓄えられているらしい。

「多分……だったと思う」

阿礼が端から三番目の倉に入り、靈夢もそれに続いた。蠟燭の頼りない明りが照らす中で、阿求がとある書庫から一冊の書物を取り出した。和綴の、題も薄れかかったその書を開き、何項目かを開いて靈夢に見せた。

「なになに、『鈴彦姫』？」

靈夢が目を落としたそこには、大体このような事が書かれていた。

【鈴彦姫——鳥山石燕の「百鬼徒然袋」にも記載された妖怪の一つ。頭部に神楽鈴を載せた女性の姿をしている。石燕は「かくれし神を出し奉んとして岩戸のまへにて神楽を奏し給ひし天鈿女のいにしへもこひしく夢心におもひぬ」と記している。

「神楽を奏し給ひし天鈿女」とは、日本神話で天岩戸に隠れてしまった天照大神を引き出すために活躍した女神、アメノウズメを指すと思われる。

人の世から忘れられ、妖怪化した彼女が幻想入りしたと考えられる。初めて幻想郷に姿を現した当初、幻想郷から夜をなくそうと鈴を鳴らし続けるが、第〇〇代博麗の巫女、博麗靈歌により調伏。以後靈歌に従い、人里の作物が枯れないように日照を操るなどして貢献するも、靈歌の死没とともに消息を絶つ」

「これ、二百年も前の話じゃない」

靈夢は年代を確かめて呆れたように言った。

「この妖怪がまた姿を現して、お酒を集めてるってどういうの？」

「お酒はどうか分からないけど、鈴を鳴らす妖怪といえはこの記録が一番しつくり来るのよね」

うくくん、と霊夢は腕を組んで唸った。

「もしこいつがまた姿を現したとして、酒を持っていく可能性が高いのはどこかしら？」

「それは……………」

そろそろ、夕闇が迫りつつあった。



## 靈々夢 (三) (追加エピソード挿入済)

平常業務を終えた店主が店じまいを始めた。いよいよである。店主は板戸を閉めてから靈夢に向き直った。

「なあ、巫女の嬢ちゃん」

「なに？」

「こんなことを言うのはあれなんだが、店は壊さないでおくれ」

一体、私を何だと思っているんだ。内心の呟きは声には出さず、にっこり笑って返す。「大丈夫。安心して。奥に下がっていなさい」

店主が言われた通りに奥に引つ込み、待つこと数分。板戸をこんこんと叩く音が聞こえた。靈夢がじつとしてしていると、板戸が

ガタアンツ!!

と音を立てて外れ、黒い靄のようなものが店に入つて来た。それは棚の酒瓶をふわりと持ち上げると、チャリンと銀貨を投げて、風が吹き抜けるように外に出て行った。

その時微かに、鈴の鳴る音が聞こえた。

靈夢はすぐにその後を追った。店内で捕縛することは可能ではあった。だが、ただ捕

まあただけでは口を割らない可能性がある。奴の行き場所と目的をはっきりさせるために、あえて泳がせたのだ。

姿が闇夜に紛れて判別しづらかったが、そこは妖気を感じ取る巫女の能力で補った。それに、時折聞こえる鈴の音も手掛かりとなつて何とか見失わずに済んだ。

(この方角は……やはり……)

霊夢と阿求の読みは当たつていたようだ。奴はあの場所を目指している。確信を持つて森の中を飛翔し続ける霊夢の耳に、周囲から無数の鈴の音が鳴り響くのが聞こえた。それらは次第に音量を増し、最後には耳を劈くような大音量となつた。

「くうっ!!」

弾幕ならまだしも、音による攻撃など想像もしていなかった。激しい振動が頭を割らんばかりに鳴り響いている。実際、凄まじい頭痛がする。眩暈が激しくなり、視界がぐるぐる回転するような感覚を生じた。

(まずい……)

相手が見えない状況ながら、霊夢は無数の札を周囲にばら撒いて応戦した。これはある程度は有効だったらしく、鈴の音が少しずつ小さくなっていく。単純に(鈴の?)数を減らすことに成功したらしい。

だが、鈴の音に紛れ、本体がすぐ近づいていることに霊夢は気が付かなかった。弾幕



種の諦観を霊夢に齎していた。既に涙も枯れ果て、ただ遣る瀬無い気分が寝起きに尾を引くのが常だった。

ここはどこだろう、と視線を彷徨わせ様子を伺う。祭壇のような物に横たわっているらしい。蠟燭の明かりが何者かの影を映し出しているのにぎよつとして、そこに顔を向けようとすると、体が麻痺したように動かない。「それ」が何か、古の言葉を紡ぎだしている。一体何を始める気なのか、何となく察しは付いている。

「あなた、鈴彦姫？」

「……………」

ふ、と言葉が止まった。しやりん、と鈴の音が鳴る。立ち上がったそれが、近付いてくる。霊夢を見下ろしたそれは、古代日本のシャーマンのような格好の少女の姿をしていた。薄い青のふわりとした上衣に、同じ色のスカートのようなものを着ていた。首周りにやけにごてごてした、勾玉が幾つも並んだ首飾りを掛けている。頭に短冊のような巫女の髪飾りを載せているが、それも随分と古式のものようだ。

見た目は霊夢よりは年上、恐らくは咲夜と同年代のようだ。尤も、妖怪に見た目の年齢など関係ない。阿求の資料が正しければ、輝夜や妹紅よりも年上のはずだ。もしかしたら八意永琳とも同世代か？

霊夢がそんなことを考えていると、それが唇を横に引いてにんまりと笑った。

「そう。わらわは鈴彦姫。古めき御世より、この国に住まう神」

「あんたが神？　笑わせないでよ。けちな酒屋から夜毎酒を買いに来る神があつてなるものですか」

鈴彦姫は笑みを引つ込め、冷気を孕んだ声で返した。

「酒をかうじゃと？　……………そうか、使い魔の者がかような……………」

一瞬戸惑つた表情を見せた鈴彦姫の様子が可笑しくて、霊夢は笑い出した。

「あつははは!!　なるほど、感心な部下がいたものね。でも、顔を見せない相手には、人間は商売しないものよ」

「活きのいい娘じゃ。これなら霊歌も満足しよう」

「私の体に霊歌を憑依させる気？」

「申すまでもなからう。わざわざ自ら訪れてくれるとはな」

「死人は大人しくあの世にいればいいのよ。復活なんてさせない!!」

「なれば古めき世の術に抗つて見せるがよい、年若き巫女よ」

鈴彦姫が片手を天に翳し、それをゆっくり下ろしながらもう片方の手で鈴を鳴らした。振り下ろされる指先が霊夢の額に突き立てられる。その瞬間、指先から電流が流れ込むような感触が霊夢を襲つた。麻痺していた体がピクンと跳ね上がる。

「あつ!!　ああつ!!　あああああつ!!」

!!!

続けざまに襲い来る電は、熱よりも冷気を伴って全身を駆け巡った。その度に霊夢の体は若鮎のように飛び跳ねる。

暫く後、ぐったりと弛緩した霊夢は、口も利けないほどに体力も霊力も損耗していた。抵抗する気力も消えかけた霊夢の涙で掠れた視界に、透明なものがふわりと現れた。無定形だったそれが人の形となり、自分に覆いかぶさってくる。それが触れた場所からひんやりした感触が広がり、逃れようともがく霊夢の中に侵入し始めた。

「ひあつ!! うあああ!!」

霊力で追い出そうとするも、逆に相手の凄まじい霊気に押されて、瞬く間に全身を乗っ取られていくのが分かる。

霊夢は自分の視界が別の誰かと共有しているのを感じていた。実に奇妙な感覚だった。今や完全に支配権を奪われた体がゆっくりと起き上がり、鈴彦姫を見て笑みを浮かべた。

「久方ぶりよのう、鈴彦姫」

霊夢の口から、いつもの霊夢のそれとは異なる声音が漏れた。

「真に。今宵こそ我らが御世の春ならん」

「ふむ。すこぶる良いぞ、この体……」

二人は暫く哄笑し合った。そして洞窟の外に出た。そこは霊歌が葬られた場所であ

り、少し前に旧地獄の間欠泉から溢れ出た悪霊の蔓延る魔境でもあった。

## 靈々夢 (四)

旧地獄——。

水橋パルスイはパルバル文句を言いながら往来を歩いていた。

大体、勇儀だつて我儘が過ぎるのだ。喧嘩の原因だつて勇儀にある。やれパルスイはやつかみが過ぎるだの、萃香と話してただけで妬むのはさすがにどうかと思うだの言われたのが端緒だった。自分のアイデンティティ（だっけ？）を否定されたような気持ちになり、そこから売り言葉に買い言葉の応酬が始まったのだ。

実は今までにも不満はあるにはあったのだが、長い時間をかけて蓄積していた鬱憤が爆発したとき、感情を抑えることができずに激しい言い争いになってしまった。勇儀の方でも事情は同じだったようで、目を吊り上げて怒声を浴びてきたのだ。

三日に及ぶ萃香の仲裁で何とか和睦を結びはしたものの、それって勇儀は私より萃香の言うことを大人しく聞くということじゃないか、という結論に至るのだった。私のことを好きだの愛してるだの言つてたくせに……。ああ、妬ましい、妬ましい、パルバルパルバル……。

緑眼を光らせながら地上に繋がる空洞に近づいた時、上空から何かが急降下してくる



気配を感じ、目を凝らした。

「霊夢……………」

紅白の巫女服を視界に捉えたパルスィは首を傾げた。地底に何の用だろうか？ 随分急だな……………あ、それはいつもか。

だが、よく見るといつもとは何かが違う気がする。何だろう？ この不穏な予感。霊夢は戦闘中真つただ中のような霊気を全身に纏わせ、パルスィには一瞥もくれずに飛び去った。

（あの方角は……………）

勇儀のいる方角だ。そしてやや遅れて、もう一体の妖怪がその後を追うように飛び去るのを認めた。あれはまさか……………。胸に浮かんだ不安を抱えたまま、パルスィはその方角を向いて立ち竦んでいた。

§

「ああ、くそっ!!」

勇儀は地団駄を踏んだ。ズシン、と地鳴りがし、周囲の建物が揺れる。周辺を歩いていた妖怪がひつ、と悲鳴を上げて、足早に通り過ぎて行つた。この三日間は最悪だった。パルスィと珍しく言い争いをして、互いに籠が外れたように思いの丈をぶつけ合つた。

千年以上も生きてきて、些細なことで喧嘩を始め、冷静に話し合うことすらできなかった。鬼の性とはいえ、一度興奮すると熱を冷ますのに時間がかかってしまう。萃香がいてくれなかったら、更に逆上していたのではないか。

そもそも、嫉妬するのはパルスイという妖怪の特性なのだ。それなしにはパルスイはパルスイたりえない。そんなことは分かりきっていた筈なのに、つい不満が口をついてしまった。不満が出るのは仕方がないにしても、パルスイの立場を考えた上でもっと穏便な言い方ができた筈なのだ。そんなことも満足にできなかつた自分がほとほと嫌になる。

萃香にも不要な心労を掛けてしまった。今頃靈夢に愚痴を溢しに行っているだろう。こんな日は酒も不味い。

その時、不意に強力な靈気が急速に近づくの気が付いた。

(早いな。通常の三倍つてところか……………)

そんなに急いでどこに行くんだろう？ そこまで考えた時、この靈気は以前感じたものに似ていると感付いた。

「靈夢？」

なんだ、萃香と一緒にじゃないのか？ 不審に思いつつ、高速で迫る靈夢を見上げてみると、なんと彼女は勇儀のすぐ近くに着地した。

「ん？」

私に何か用か？ そう尋ねようとした瞬間、霊夢が弾丸のように懐に飛び込んできた。

「な……!!」

とつさにガードするもお祓い棒の直撃を受け、激痛を耐えながら蹴りを入れる。さすが身を翻した霊夢は勇儀から数間の間合いを取った。

「はっ、いきなりしかけるとは血気盛んだねえ、霊夢。何か良いことあったのかい？」

「……腕は鈍ってないようだな、星熊勇儀」

にやりとする霊夢に、勇儀は違和感を感じた。こいつは確かに霊夢だ。だが、何が違う。こいつは私の知ってる霊夢じゃない。

そうだ、この霊力の波動……。目の前の小柄な少女の姿が、二百年ほど前に相対した、長身瘦躯の女のそれと重なっていく。桁外れの霊力を身体の補強に全振りし、体術で強力な妖怪を次々と調伏していった博麗の巫女……。

「お前……霊歌か？」

「なんだ、覚えていたのか。人間のことなんて百年も経てばすっかり忘れてると思っただけ」

「そりゃ、人間によりけりさ。あんたみたいないけない奴は忘れたくても忘れられ

ないよ。それで？ 曾孫の体を借りてまで私と決着を付けに来たのかい？」

「決着？ あの時のは私の勝ちだろう？ それに今回は別件だ。あんた、この娘に言うべきことがあるんじゃないか？」

勇儀の目が一瞬見開かれ、一転して細められた。

「……なんだ、そのことか」

「なんだ、とは何だ。私がただで済ますと思っていたのか？」

「ふん、弱い人間の女が妖怪に食い殺された、ただそれだけのことさ。珍しくもない。なぜ鬼の我々がそんなことを気に留めなきゃならん？」

「気に留める？ そんなこと求めていない。私が求めているのは……」

靈夢の姿が突然掻き消え、次の瞬間、勇儀は背後から思い切りどつかれて前のめりに倒れそうになった。すぐに両手を付いて反転しながら足を振り上げて反撃するが、予想していた動きだったのか、靈歌（靈夢）は軽く顎を反らしてそれを避けた。

「落とし前さ」

「くくく……」

起き上がり、血の滲んだ唇を拭う勇儀。

「そうだった。あんたはそんな女だったね。いいとも、気が済むまで……」

一瞬で間合いを詰めた勇儀に、横面を張り倒された靈夢が吹っ飛ばす。靈力を身体強化

に回していた霊夢（霊歌）は、顔をしかめながらも立ち上がった。  
「殴り合おうじゃないか」

## 霊々夢 (五)

それからの数時間、旧地獄で行われた肉弾戦は後世の語り草になるほどの激戦だった。普段と異なり、スベルカードや弾幕を一切使用せずに只管殴り合う二人。それを遠巻きに眺める旧地獄の住人達。余りの激しい戦闘に何度も地揺れが起き、何事かと地霊殿の主までが自ら足を運んできた。

地霊殿の館主にして、旧地獄の統治者である古明地さとりは二人の心の中を読み、また久方ぶりにその姿を見せた鈴彦姫の姿を認めて、何が起こっているかをほぼ完全に理解した。そして、これは第三者が迂闊に手を出すべき問題ではないと判断した。

一方、不干渉に徹する領主を見て、彼女のお墨付きを得たと考えた妖怪たちは、どちらが勝つか賭けを始める始末だった。

「一体、何をしてるんだよ、勇儀も霊夢も……」

迷った挙句、激しい地鳴りにいても立つてもいられなくなったパルスィは、結局様子を見に戻って来ていた。これはいつもの霊夢とは違う。パルスィにもそれはすぐに分かった。だが、一体二人が何を争っているのか、数時間にも及ぶ殴り合いと罵りあいの中でぶつけられる言葉の切れ端をかき集めて、何とか理解することができた。

「あんたが牛鬼なんて飼ってたのが悪いんでしょ」

互いに随所から流血し、息を荒げている。霊夢（霊歌）の言葉に、ふん、と鼻で笑う勇儀。霊夢（霊歌）が一層目を吊り上げ、全身から強力なエネルギーを迸らせる。

「はああああっ!!!」

両の拳を赤く光らせ、霊夢（霊歌）が勇儀に殴りかかる。たつぷりと霊力を蓄えた突きをガードしながらも、勇儀は辛そうに後退した。一頻り連打を受けきった勇儀は、霊夢（霊歌）の不意を突いて胸倉を掴み、強烈な頭突きを見舞わせた。

「ぐっ!!!」

さすがにふら付いて後ずさる霊夢（霊歌）を見下ろしながらも、勇儀は追い打ちを掛けなかった。

「牛鬼をペットにしちやいけないなんて、誰が決めたんだ？ 貴様ら人間ごときの都合に、何で鬼が振り回されなくちやならん？」

霊夢（霊歌）は上目遣いで勇儀を睨んだ。

「人間、人間うるさい!! あんたは黙ってこの子に頭を下げりやいいんだ!!」

「へ、やなことだ」

（そうか……そうだったんだ）

それらのやり取りで事情を察したのは、パルスイだけではなかった。体の自由を奪わ

れながらも、霊夢は全ての状況を把握していた。

(霊歌……あなたの言いたいことは分かるよ。でも……)

そんな人間的な感情や義理を妖怪に、それも鬼に求めてはいけないんだよ。母様のこととは確かに辛かったし、今でも苦しんでいるけれど……でも、それは私が背負うべきものであって、亡くなったあなたが問いただすべき問題じゃない。

——つまりは私が、この戦いを終わらせないと。

そして霊夢は、持てる全ての意識と霊力を集中した。

「ん?」

霊夢(霊歌)の動きが止まったことを訝しみながら、勇儀は油断なく彼女を見つめていた。その霊夢の体が、虹色の光に包まれていく。

「これは……夢想封印!」

強力な霊夢のスペルカード発動を見て、周囲にいた妖怪が、巻き添えはごめんとばかりにこぞって踵を返して逃げ出していく。それでも幾つかの妖怪たちは周囲の喧騒を意に介さず、霊夢を注視し続けていた。

その内の一人、古明地さとりは奇妙な現象に目を奪われていた。

(どうやら、霊夢さんの意識が戻り始めていますね。しかし、この夢想封印らしきものは彼女の体内で炸裂しているようにも見えますが……大丈夫でしょうか?)



そして、その場に残った者は七色の光が収束した後、そこにただ佇む霊夢の姿を見た。いつになく静かな、しかしどこか悟ったような霊夢の表情を見た勇儀は、そこから霊歌の霊気が消滅していることに気が付いた。そうだ。こいつは正真正銘の霊夢だ。勇儀はそう確信した。

つかつかと歩み寄る霊夢に、勇儀は身構えることなく正対した。

「一っただけ聞いわ」

霊夢の、落ち着き払った、しかし意思の強さを感じさせる声が響く。

「何だ？」

勇儀の方も、物怖じする様子は一切見せず、堂々と問い返す。

「あなたのペットのせいで、母様は死んだの？」

「……そうだ。私の飼っていた牛鬼がお前の母親を食った」

「……そう」

一度俯いた霊夢は、真つすぐに勇儀を見上げた。

「パアアン!!」

一同固唾を飲んで見守る中、乾いた音が一度だけ鳴り響いた。

霊夢はそれきり、鬼に背を向けて何歩か歩きだすと、ふわりと浮き上がって地上に飛

び去って行った。

一方の勇儀は、打たれた頬の痛みをそのままに、ただ立ち尽くしていた。たった一発のただの平手打ちが、さっきの霊歌との殴り合いより何倍も、何十倍も痛く感じていた。

## 靈々夢 (終)

「お疲れ様、靈夢。これが今回の報酬よ」

翌日、全身の痛みにうんうん唸りながら、靈夢はいつものようにひよっこり「隙間」から現れた八雲紫に事のあらましを報告した。一通りの説明を受けた紫が労いの言葉を投げかける。差し出された包みには目も呉れず、靈夢は昨夜考えたことを紫にぶつけてみる。

「紫……今回のことだけど、不審な事がいくつもあるわ」

「あら、どういうこと?」

「酒屋で聞いた鈴の音、よくよく思い出してみたら鈴彦姫の鈴の音とは違ってた」

それで? と微笑を浮かべて先を促す紫に靈夢は続ける。

「冷静に整理してみると出来過ぎなのよ。『鈴の音』という手掛かりだけで阿求が二百年も前に姿を消した鈴彦姫のことを示唆したり、靈歌の靈が蘇っているのに四季映姫も小野寺小町もちらりとも姿を見せなかった」

「ふうん? でもあの閻魔も最近忙しそうよ? 死神の方は例によって寝ていたのかも知れない」

「確かに、ね。それはそうと話は逸れるけど、靈歌と鈴彦姫は今どうしているの?」  
「靈歌はあの世に戻って行ったそうよ。鈴彦姫は元々靈歌の靈廟を守っていたらしいから、あの場所に行けばまた会えるかもよ?」

靈夢は肩を竦めて首を振った。靈歌と鈴彦姫の真意が分かった今、報復してやろうなんて思わないし、鈴彦姫が人間を無暗に襲うとも思えなかった。

「別にいいわ。話を戻すけどね、酒屋から酒を手に入れたのはあいつじゃないでしょ。お酒自体は靈歌の魂を呼び戻す為の儀式には使っていたわ。鈴彦姫は使い魔に入手させたようなことを言ってたけど、その下っ端は結局姿を現さなかった」

「じゃあ、酒屋に現れたのは何者だったのかしら?」

「少なくとも、あの店に特上の酒があることを知っていて、人里では通貨が必要だという人並みの知性も持っていて、すばしこくて、変化の術を持っていて、鈴を身に着けている奴ね。私の知り合いに、そんな式神を操る更に上位の式神と、その主がいたりするのよ」

「……………」

無言で微笑を返す紫。

「しかもそいつは、冥界の靈を管理する白玉楼にも顔が利くときている。思いつくのは一人しかいないわ」

やや天を仰いだ紫は、諸手を挙げて見せた。

「……………降参よ。よく出来ました」

「全く、食えないわね、紫」

「うつつふふふ。でも、少しはすつきりしたでしょう？」

「……………」

「ねえ、霊夢。たまには墓参りにでも行きなさい。霊歌があのに戻る前に言っていたわ。霊奈がとても心配しているって。『自分が不甲斐ないばかりに、娘に寂しい思いをさせてしまつて申し訳ない』だそうよ」

不覚にも、そこで霊夢は言葉に詰まり、同時に涙が一筋零れ落ちた。母の名とその言葉には、胸の中で凍り付いていたものをじんわりと溶かしていくような不思議な温かさがあった。慌ててごしごしと涙を拭う霊夢。その時、縁側からこつそりその様子を見守る者があつた。

「萃香？」

おずおずと現れた萃香は、座敷にいる霊夢に向かって膝を付いた。え？ と戸惑う霊夢に、萃香はしやくりあげながら土下座して見せた。

「ごめん、霊夢……………ずっと、ずっと言おうと思つていたんだ。あの時、勇儀から牛鬼を見ていてくれと言われてたのに、つい目を離れたのは私なんだ……………本当は、全部私のせい

なんだ……」

「……………」

すつと立ち上がった霊夢は、萃香の目の前に立った。

「ごめん、霊夢。どんな罰でも受けるから……」

霊夢がしやがみ込んだ。萃香は涙をぼろぼろ零しながら、霊夢に裁可が下されるのを待った。

バシィツ!!

「いっつ!!」

萃香がおでこを抑えて悶絶する。霊夢のデコピンがさく裂したのだ。

「もう済んだことにいつまで拘ってんのよ。馬鹿な事言っていないで、上がりなさい。お酒飲む約束だったでしょ?」

「はえ……」

気を抜かれたように霊夢を見上げた萃香は、今度は霊夢にしがみ付いた。後ろに倒れそうになり、霊夢はなんとかバランスを取る。

「ちよつ、こら!! あんた怪力なんだから少しは加減しなさいよ」

「あらあら……鬼の目にも涙ね。そうだ、霊夢。あの酒屋の主人から、例の酒をたんまり頂いたわ。これからどう?」

背後から紫の音が掛かる。

「それ、いいわね」

振り返った霊夢はぎよつとした。紫が「隙間」から、酒樽を五つも取り出して見せたのだ。

「ちよつと……そんなに飲めるはずないでしょ!!」

咄嗟に叫んだ霊夢だったが、そこで少し思案顔になった。一つ深呼吸して、霊夢は屋根を見上げて声を上げた。

「天狗~~~~!! いるのは分かってるわよ、降りてらっしゃい!!」

「あやややややや!! さすがにお気づきでしたか……」

屋根から烏天狗、射命丸文が姿を現す。頭を掻きながら申し訳なさそうな顔をしているが、これは完全にポーズでしかないことを霊夢も承知していた。

「昨日の今日だし、絶対来ると思ってたわ。それより、地底の奴らとその辺の奴らに声を掛けて来て。特に旧地獄の面々には迷惑かけたし、お詫びも兼ねてこれから宴会を開くつて。あなたへの報酬は取材の許可とお酒。それでいい?」

「さすが霊夢さん。話が早い。それで、旧都に行くのはいいんですが……その……」

言い淀んだ文の意を察した霊夢はすぐに応じた。

「当然、勇儀も呼んで来なさい。来なかったら許さないって伝えて」

「了解です!! では早速!!」

霊夢に敬礼をして見せた文は、一瞬で遙か彼方に飛び去った。それを見送る霊夢を、紫は目を細めて眺めていた。白玉楼で霊歌が最後に見せた微笑は、生前彼女が紫に見せたのと全く同じだった。

今は亡きあの巫女の面影が目の前の少女に重なっていく。今回は、霊夢が歴代の巫女の素質を十分に受け継いでいることを確かめることができた。

そこではたとあることを思い出した紫は、背後から霊夢に近寄り、慣れた手つきで髪を梳き始める。

「な、何するのよ、紫」

「いいから、じつとなさい」

霊夢の髪を一つに束ねた紫は、赤いリボンで彼女の髪を結ってやった。森で霊夢が落としたのを藍が持ち帰ってくれたのだ。

「ほら、これでいつも通りでしょ」

黙って頬を染める霊夢。

「どうしたの?」

「な、なんでもない!!」

慌てて取り繕う霊夢に首を傾げる紫。



霊夢にしてみれば、昔母にこうして貰っていたことを思い出したなんて、とても言えるはずがなかった。

## メイド長の午後のひと時

柔らかな冬の日差しの中にも寒風吹き荒び、人々は厚手の外套なしには外も歩けないほどに空気は冷え切っていた。

紅魔館の門番・紅美鈴（ホン・メイリン）はいつも通り、館の門の脇で腕を組んだまま外壁に寄り掛かって両目を閉じていた。眠っているのではない。周囲の音に耳を澄ませ、生命の発する僅かな気の揺らぎにも気付くことができるように意識を尖らせているのだ。

今日も陽の昇らぬうちから立ち続け、既に太陽は中天に差し掛かっている。

美鈴の首周りには、メイド長が手ずから編んだ赤いマフラーが巻かれていた。自分は妖怪なので寒くはないと言っておいたのだが、見ているこつちが寒いなどと言ってメイド長の十六夜咲夜（いぎよい・さくや）が首に巻いていったのだ。普段取っ付きにくい彼女からこうして親切にされると、内心

「うっひょ〜!!」

などと叫んでしまいましたくらいには嬉しかったのだが、それをやると冷めた目で見られそうなので、ごく普通に礼だけを述べておいた。

そう、元々寒くなどない。寒くないのだが、こうして彼女の編んだマフラーの感触に顔を埋めていると――

(咲夜さん……ああ、咲夜さんの甘い匂いがする……これじゃまるで、咲夜さんの胸に顔を埋めてるみたい……)

至福感が胸を満たし、危うい妄想が脳内を支配する。そしていつしかそれは――  
！。

§

メイド長を押し倒した美鈴が、抵抗を封じながら耳元で囁く。

「もう逃がしませんよ、咲夜さん」

「だ、駄目よ、美鈴……私たち……」

「うっふふふ。咲夜さん、顔が赤いですよ。本当は期待してるんじゃないんですか？」

「っ!! ち、違うわ!! そんなんじゃない!!」

「でも、体は正直ですよ……」

つつ、と美鈴の指が撫で下ろすと、それに反応してビクンと背を撓らせるメイド長。

「やめて、美鈴……」

涙目で訴える咲夜に、美鈴は押し被せるように言った。

「いいえ、やめません。今夜は寝かせませんよ……」

S

グサリ、と頭に何か刺さった。

「ぎいっ!!」

激痛の余り目を覚ます。目の前にはやはり、と言うべきか、氷のような目で美鈴を見つめるメイド長の姿があった。頭に手をやると、咲夜専用の銀のナイフが刺さっている。

「真面目に仕事してるかと思ったら……こんなことならマフラーなんて編むんじゃないわ」

「ご、ごめんなさい……」

ナイフを抜いて咲夜に返しながら頭を下げる。

「お昼、用意できたけど……いらなそうね。睡眠中にごめんなさいね」

冷淡に言い捨てて背を向けた咲夜に、美鈴は慌てて付いて行く。

「す、済みません……でも、周囲の気は読んでいたんですよ、これでも……」

「あら、そうなの？ その割には、私が近づいても気持ち良さそうに熟睡していたじゃない」

「そ、それは!! 咲夜さんには悪意がなかったからですよ!! 敵なら気づいてましたって!!」

「ふうん？」

疑わし気な返答はしたものの、追い返そうとはしない咲夜を見て、美鈴はほつと胸を撫でおろした。良かった……思ったより怒っていなかった。あまり怒らせると、危険な目に合うのだ。

自分ではなく、咲夜が。

彼女は気付いているのだろうか。常に時空間を操り、紅魔館の広さを調節する能力の特殊性の故か、または時止めの能力を頻用しているためか……。彼女の心の乱れが、彼女自身の「気」の乱れを引き起こし、それが遂には肉体と精神の摩耗に繋がっていることを……。

目の前を行くメイド長からは、そんな気配は微塵も感じられない。少なくとも今は健全なようだ。自分よりも遥かに儂い存在である彼女を、何としても守ってあげなくては——。ふとそんな思いにとらわれる美鈴だった。

§

午後も三時を回った頃——。

紅魔館のバルコニーに立てた日傘の蔭で、館の主レミリア・スカーレットが小洒落たアイアンチェアに腰を下していた。そのすぐ傍らには、彼女に仕える完全で瀟洒なメイド・十六夜咲夜が瀟洒な手つきで瀟洒なティーカップに紅茶を注いでいる。

「お嬢様。本日は新しい茶葉が手に入りました」

ティーカップをレミリアの前に差し出して瀟洒に微笑むメイド長。しかしレミリアは、用心深く探るような目で従者を一瞥し、ティーカップの中を覗き込む。

「嫌な予感しかないわよ。どれ……………ごふつ!! げほつ!! ごほつ!! こ……………これ……………一体何淹れたのよ!?!」

にっこりと天使のように微笑む咲夜。

「百年物のローズヒップでございます」

「そのどろろが新しいのよ!!」

「はい。色々、試みが新しいかと」

「そんな斬新さ、要らないわよ!! すぐに普通のを淹れ直してちょうだい」

「畏まりました」

澄まし顔で答えた直後、新しく淹れた紅茶を差し出す咲夜。相変わらずにこにこと微笑む彼女を横目で見ながら、慎重に口をつけるレミリア。

「あら、おいしいじゃない。そう言えば、チーズケーキも持ってくるように言ったでしよ」

「今初めて仰いましたね」

「いいから、早く持ってきてなさい」

「はい。ただ今」

「またも、一秒と経たずに目の前にチーズケーキが現れた。」

「あら？　これ……」

レミリアは怪訝な表情を浮かべた。

「はい。徴びております。ですので捨てようと思っていたのですが……」

「先に言いなさいよ!!」

「ふふふ……代わりと言ってはなんです……」

レミリアの前に、瞬時にして姿を現したプリン・ア・ラ・モード。

「さすが、気が利くじゃない」

即座に顔をほころばせるレミリアを見て、優し気に微笑む従者。二人だけのティータイムを、柔らかな午後の日差しが包み込んでいた。

## 人と魔の狭間で

館裏手の倉庫に通じるドアが開き、薄暗い庫内に荷車を引く者がいた。ドアの向こうから差し込む光の中にそのシルエットが浮かび、長い影法師が床に伸びている。紅美鈴は更に館内部に通じるドアを開き、キッチンに顔を出した。

「咲夜さくん、新しい死体です」

「ありがとう。すぐ行くから待ってて」

咲夜が倉庫に移動すると、荷車の上に人一人分に盛り上がった簧巻きが載せてあった。倉庫の扉を閉めた美鈴は、簧巻きを台の上に運んだ。

「ルーミアから？」

「はい」

箆をはがすと、中からスーツ姿の若い男の死体が現れた。事故にでもあったのだろうか。両足が折れ、そこから血が滲んでいた。血液はまだ乾燥すらしていない所を見ると、死後まだそれほど経ってはいないだろう。

「随分新鮮じゃない。どこで拾ってきたのかしら？」

「さあ、そこまでは……」



「さあ、早速捌こうかしら」

「はい……………お手伝いします」

「大丈夫よ。あなたは仕事に戻って」

「……………」

「どうしたの？」

「咲夜さん、あの……………」

「なあに？」

メイド長の目には一点の澱みもなく、そこにはある種の微笑すら浮かんでいるのに気付いた美鈴は、一瞬ぐつと詰まったような顔を見せた。一瞬口ごもった美鈴はしかし、その翳りを振り払うように笑顔を返す。

「では、門番の仕事に戻ります」

「ええ、お願いね」

はい、と頷いて見せながら背を向けた美鈴は、やや重い足取りで扉を開いた。既に人であることを半ば捨てているメイド長に、妖怪の私が今更何を言えるだろう？

彼女は人間の社会では迫害を受け、この紅魔館に拾われて今に至る。そうでなければどこかで野垂れ死んでいたかも知れない。

紅霧異変後には、一部の人間には若干とはいえ心を許すようになってきている。あの

博麗の巫女やコソ泥魔法使いのように。だが、それは咲夜さんの側の変化というより、あの二人がそもそも変わっているのだ。

美鈴がこの問題に気付いたのは、メイド長と久しぶりに人里へ買い出しに行った時のことだ。

彼女のことを、人里の人間たちは面にこそ出さないがどこか距離を置きたがっているような目で見ていたのだった。咲夜の方も顔にこそ出さないものの、それを察している節があつた。問題というのは、本人がそれに対する感情を押し殺しているのではなく、ごく当たり前の事として受け取っていることだ。その時、ふと気付いてしまった。

——彼女は、人としての幸福を諦めている。

美鈴は知っている。咲夜がレミリアに抱く感情の奥底にあるものが、何かに縋りつく幼子のそれと本質的に変わらないことを。メイド長が時折変な紅茶を淹れてはレミリアをからかつて見せるのも、子供が大人の愛情を試すときのそれと同じものだということを。

齢五百歳の当主もそれを分かっているからこそ、文句を言いつつも本気で叱り飛ばしたりはしない。

今しがた人間の解体を始めた彼女には、既に人の遺体に包丁を突き刺すことに何ら抵抗を感じていない様子だった。少なくとも、それを他人に悟らせぬ程度には。

むろん、吸血鬼である当主に仕えているのだから必要な仕事ではある。レミリアとしては、館の一員として彼女を信頼しているからこそ吸血鬼の生命線とも言える血液の確保を任せているのだろう。だが、普通人間は人間に対して、あのような行為には抵抗を覚えるのではないか？ それをいとも簡単にやってのける彼女は、人としての感情が摩耗しているのではないだろうか？

彼女以外の館の住人が人を餌食とし、その手を人の血で汚すのは問題ない。だが、寄りに寄って人間である彼女が、あのような行為を率先してするべきなのだろうか？

美鈴はもう一つ、重大なことを知っている。永夜異変の際、彼女がレミリアに言った言葉を。

『私は一生死ぬ人間ですよ』

彼女は、人でありながら人の幸せを捨て、しかも魔物である私たちの側に立つて生きていくつもりなのだ。だが、このままでは彼女の心はどんどん人から離れていく。それはいつか、彼女の精神を破壊してしまうことにはならないだろうか？ いつか罪の意識に目覚め、それが彼女を追い詰めないとも限らない。

気づいていながら放置するのは、怠慢であり、罪でもある。何より、このままでは咲夜のためにならない。

美鈴の足は、再び倉庫に向かっていった。

「咲夜さ——」

ドアを開け、メイド長に声を掛けようとした美鈴はその場で硬直した。

咲夜が半ば解体を終えた状態で、床に座り込んでいた。微かに震える肩が、いつになくか細く思えてくる。背後から近づくと美鈴に気付いているはずだが、彼女は振り返ろうとはしなかった。

俯くメイド長の頬から涙が零れているのを確かめた美鈴は、背後からそつと彼女を抱き締めるのだった。

## Locked Girls / ヴワル魔法図書館

ヴワル魔法図書館。紅魔館の地下にある広大な空間に、何百万冊という魔導書がぎっしりと詰め込まれている。

「小悪魔、ここに書いた本を取ってきて」

「あ、は〜い!!」

リストを手渡された使い魔の小悪魔が、ばさばさと翼を羽ばたかせて本棚の向こうに消えた。

館主レミアアの親友にして食客でもあるパチュリー・ノーレッジは、この魔法図書館で睡眠を除いたほぼ丸一日を過ごす。移動が面倒だからと図書館裏口近くに自室を借りるだけでは飽き足らず、その裏口付近に大型のテーブルを構え、何十冊もの魔導書을載せて日々魔法の研究に勤しんでいるのだ。

幻想郷を代表する知識人にして最高格の魔法使いではあっても、未だ実現できていない課題は幾つもある。その一つが「空間拡張魔法」である。紅魔「城」と呼んでも差し支えない規模と威風を誇る紅魔館だが、内部空間はメイド長十六夜咲夜の能力によって、物理的制約を大きく超えて拡大されている。

この図書館自体が、物理的な容積の30倍近くも広くなっている。図書館のみならず、レミアアの居室やその妹、フランドール・スカーレットの部屋、それらに至る迷路のような廊下など、数え上げれば十を下らない箇所が二十四時間、年中無休で空間拡大の恩恵を受けている。

それは一方で、メイド長の心身に大きな負担をかけていることを意味する。見かねたレミアアやパチュリーが無理をするなど何度も忠告したのだが、本人は「大丈夫ですよ」と言つて取り合わない。尤も、その恩恵を享受しているパチュリーとしては即座に空間拡張を解除されると、それはそれで困るのではあるが。

「あのままじゃ、あの子……」

今、図書館で魔導書を広げるパチュリーの目の前を浮遊しながら、レミアアは努めて冷静に話していた。

「三年持たずぼつくり逝くわ。さつきね、少しでも血を飲ませて貰ったのよ。愕然としたわ。一か月前より、味がすぐ分かるくらい薄くなっているんだもの」

パチュリーは魔導書から目を上げてレミアアを見つめた。レミアアは昔から素直じゃない。紅魔館当主としての矜持がそうさせるのだろうが、本当は内心かなり取り乱しているのが分かる。

「それで、どうして欲しいの?」

「咲夜の負担を減らしてあげられない？」

「そうは言っても、本人が忠告を聞き入れないんじゃないでしょうか……」

「この館の空間制御、魔法で何とかならないかしら？」

「ああ、そういうこと……」

この問題は、レミリアから何度か仄めかされてきた。だが、月人の科学技術ならまだしも、遥かに劣る人間の魔術理論でそれが可能なのか。そもそも時空間を制御している咲夜本人ですら、その原理を理解していないのだ。

パチュリーもそれについては一度手を出しかけたのだ。だが、借り受けた咲夜のスペルカードを見た瞬間に戦慄を覚えた。かつて見たことも無いほどに複雑な魔術コードが幾重にも織り重なり、脳内の神経細胞ネットワークのように複雑な共鳴構造を有していたのだ。魔術書として最も難解とされる「ネクロノミコン」すら、幼稚なコミック程度にしか思えなくなるほどに。

(ありえない………)

この複雑極まるスペルカードを自在に操る彼女は、天才という言葉では表現しえないほどの逸材である。もはや神の領域に片足を突っ込んでいる才能なのは間違いない。

その時に受けた衝撃、背筋が凍り付く程の驚愕は未だに忘れられずにいる。それでも、スペルカードの控えを魔術光子格でコピーして日々解析を続けていたのは、せめて

もの魔法使いとしての矜持だった。

「レミイ……………」

レミアはいつの間にか、対面に腰を下ろして腕を組み、じつとパチュリーの様子を伺っていた。今回の彼女は本気だ。友人として、ここで引くことはできないと悟る。

「やってみてもいいわ」

ほつ、と少し緊張した顔を綻ばせたレミアに、パチュリーは念を押した。

「でも、他の魔法研究はほぼ出来なくなる。今までのように、あなたの思い付きで宇宙口ケットを作ったりできなくなる。宜しい？」

「当然よ。そんなもの、河童にでもくれてやればいいわ」

（呆れた……………」

月に行くとか決めた時はさんざん人をけしかけ振り回した癖に…………。だが、これが本当のレミアアなのだろう。彼女は身内にはとことん甘いのだ。たかが人間のメイド長などど切って捨てるような冷酷さは持ち合わせていない。

（私はね、レミアア……………」

パチュリーは密かに思った。

（そんなあなただからこそ、あなたが望むことは何でも叶えたいって思うのよ）

だが、そんな思いは顔には出さない。



「レミイ、一つ頼みがあるのだけど」

「なに？」

「正直な話、私一人では難しいかも知れない。あと十年くれるならまだしも、事は急を要するのだし。オモイカネに知恵を借りるべきだと思う」

途端、レミリアは難しい顔になった。月人たるオモイカネこと八意永琳は、見た目こそ二十台後半と言ったところだが、推定年齢一億歳以上とも言われる。人間を遥かに超える英知を誇る月人にして、「月の頭脳」とまで言われる超が付くほどの天才であり、知恵者であり、賢者でもある。

だが、レミリアが面白半分月に月を襲撃した経緯もあり、かつ永琳が咲夜と同等の時空間制御能力を持つこともあって、レミリアは彼女に好意を抱いていなかった。そもそも永夜異変の際は敵同士でもあり、先方もこちらを良くは思っていない筈なのだ。

「空間制御魔術は、時間制御魔術でもある。成功すれば、咲夜と類似した能力を持つ月人にとつて脅威と成りうる。永夜異変は終わったとは言え、互いに潜在敵対者である以上、有効な助言が得られるとは思えないけれど」

レミリアの言うことは分かる。しかし――。

「それでも……僅かな可能性であっても、咲夜の命には代えられない」

パチュリーが言わんとしたことを、レミリアは続けて言った。

「いいわ。話は主である私がつける。いずれ咲夜の身体のごときは永琳に診てもらわないといけないのだし」

そう、それがもう一つの問題だ。咲夜に飲ませているのは、パチュリーが薬草を煎じた魔法薬、エリクサー。しかし、その奇跡の回復薬を毎日飲ませているにも関わらず、咲夜は日々衰えている。もはや人を不老不死たらしめる蓬莱の薬しか頼るものはないのではないかとパチュリーは思い始めていた。

「お願いね。それと、やはり咲夜には私から改めて話しておく。彼女、既に寿命をかなり削っているわ。私達が本気だと悟れば、少しは言うことを聞いてくれるかも知れない」

頷いたレミリアは、颯爽と飛び去って行った。すぐに竹林にある永遠亭に向かったのだろう。

「あの、パチュリー様」

小悪魔が頼んだ書籍を両手に抱えて戻ってきた。

「ありがとう。すぐに悪いけど、図書館の本を別室に移動させるから手伝って」

そうだ。まず広大な図書館内の膨大な書物を移動させなければ、咲夜は能力解除に応じないだろう。林立する本棚を見上げるパチュリーの前で、小悪魔が立ち竦んでいる。

「……………あの」

「どうしたの？」

「咲夜さんの話、本当なんですか？」

「聞いていたの？」

「はい……………あの、私……………」

涙ぐむ小悪魔にパチュリーは優しく声を掛けた。

「きつと大丈夫よ。いいえ、大丈夫にして見せる」

「はい……………でも……………」

涙をぼろぼろ零しながら、辛うじてそれだけを呟いた小悪魔の両肩を、パチュリーはそつと抱き寄せた。

小悪魔が使い魔として初めてここに召喚された当初、咲夜から様々な事を教わっていたのを館の誰もが知っている。悪魔の世界でも下位の序列だった小悪魔は最初萎縮していたが、咲夜の適切な助言と励ましのお陰で随分と成長している。彼女にとって、咲夜は先輩であり、友人であり、掛け替えのないお姉さんのような存在なのだ。

「小悪魔、これからバリバリ働くわよ。覚悟はいいわね？」

小悪魔の両目は、潤んではいるものの既に固い決意の光を宿していた。

「はい。頑張ります!!」

思えば紅魔館の住人にとって、静かな戦いの日々が始まったのはまさにこの時であつ

た。

## ミスティア・ローレライの告白

既に日もとつぷりと暮れ、月の光も木々の梢に遮られる森の中は闇が広がっている。だが、人里に通じる細い道を抜けていくと、遠目にもぼんやりと赤い提灯の明かりが浮かび上がるのが見えてくる。

そこへ向かつて更に歩みを進めると、ヤツメウナギのかば焼きの香りが漂ってきた。「よお、慧音。今日は早いな」

先客の上白沢慧音に声を掛けると、藤原妹紅はすぐ隣に腰を下ろした。屋台の女将、ミスティア・ローレライに会釈する。

「熱いの一本頼む」

「はい。ただいま」

その後暫く、慧音と他愛ない会話に興じた妹紅は、ミスティアに勧められた肉を頬張る。「……女将、久しぶりに食べるよ、こんな美味しい煮付け。鹿か何かかい？」

「鹿ではないみたいですけど、永遠亭の兎、＼てゐ＼から買い取ったんです」

「ふうん……そう言えば、ミスティア、人里でも店を開いていたろう？ 確かあの頃にもこんな肉を食べさせてくれたよな」

「ええ、このお肉、定期的に入ってくるんです」

慧音がそこで口を挟む。

「ねえ、前から聞きたかったんだけど……ミスティアの居酒屋、人里でも人気だったのにならうしてやめてしまったの？」

ヤツメウナギをたれに漬け込んでいたミスティアはそこで手を止めた。少し遠い目をして黙った後、ため息を吐き出すように言った。

「そうですね……もう事時効ですし、この際だから話しておいてもいいかも知れませんか」

この幻想郷では、人と妖怪の間には厳然たる力の差があるため、大抵の人間は妖怪に恐れをなして近づこうとはしない。臆病でしたたかで、異分子は排除したがる人間の住む集落に溶け込むのは至難の業なのだ。

温厚で教育熱心な慧音ですら、人里に受け入れられるまでにかかりの時間を要した。それまでにあらぬ噂を立てられたり、闇夜に紛れて寺子屋に石を投げつけられたり、ボヤ騒ぎになったこともある。

そうした長年の労苦の末にようやく人間の信用を得て、今や人里で寺子屋の先生と言えは慧音を指すまでになっている。それだけでなく、慧音は他の寺子屋の先生とも月に一度は寄合を開き、子供の教育をめぐる問題について話し合い、親交を深める努力を怠

らなかった。

そんな慧音からすれば、せっかく人里に受け入れられたのにあつさりそれを手放したミスティアの行動が奇異に映ったのだ。

「あれはもう五十年くらい前になりますか……当時人里の家を一軒買い取って居酒屋を始めたのは……最初は無論、私が妖怪だということでは人間からは警戒されました。それは慧音先生もよくお分かりかと思えます。

あの時は慧音先生に人里で色々取り計らって貰い、本当に感謝しています。私が比較的早く人里に馴染めたのも慧音先生のお陰もあるのです。もっとも私は見るからに弱小の妖怪ですから、人間の方でも余り怖がる要素がなかったのかも知れませんが……」

ミスティアはそこで、空になった妹紅の爛を下げ、新しく湯煎から一本取りだして妹紅の前に置いた。

「最初は一人で切り盛りするつもりだったんです。でもお客さんが増えるに従い不便を感じるようになりました。そこで、一人お手伝いを雇うことにしたんです。店の前の張り紙を見て、若い男がやって来ました。健康な体つきをしていましたし、少し話をして実直な青年であることが分かりましたので、すぐに雇うことにしました」

妹紅は赤らんだ顔でふんふんと頷いている。慧音はその青年のことを知っているよ

うで、ああ、あの子、という顔をして見せた。

「妹紅も顔くらい見たことある筈よ」

「そうか？ 覚えてねえなあ……」

「働き始めて三か月ほどは何の問題もありませんでした。むしろ体力仕事をよくこなしてくれましたので、私としては大助かりです。少し気がかりなことが起こり始めたのは、そうですね、秋も深まる季節だったでしょうか……」

ちようどその頃、二人連れのお客さんがよく店を訪れるようになっていました。お得意さんと言っていていいでしょう。悪酔いもしないし、金払いもいい。程よく酔ってお帰りにならない。正に理想のおお客様です。

そのお二人に、その青年がちらちらと視線を送っていることに気が付いたのです。最初は気のせいかと思いました。でも注意して彼を見てみると、そのお二人や近くの席に料理を運んでいくときなど、ほんの一瞬ですが、ほかの客よりも長く視線を留めているのです」

「最初はそれが何故だか分かりませんでした。私は妖怪ですから、人間的な感情には疎かだったんです。でもそれが少し熱を帯びたような、それでいて苦し気なものであると分かっていたからは、何となく察しは付きました。それで、私は彼にこう言ってみたのです」

『あの二人、お似合いよね。きつと末永く幸せでいるわ』



「彼はぐつと詰まったような顔をして、それからこう言いました

『同性同士の恋愛なんて』

妹紅と慧音は顔を見合わせた。少し沈黙が流れたが、ミスティアは続けた。

『『同性の恋愛なんて』、彼はその続きを言いませんでした。しかし、その後の言葉は割合陳腐なものが続いたことでしょね……まあ、最初は複雑に思えた人間の感情も分かつてしまえば案外詰まらないものです。

その後、彼は黙々と従来通り働き続けましたが、どうも思いつめるような顔を見せることが増えていきました。それでも、彼はいい使用人でしたし、客にも分け隔てなく丁寧に対応しておりました。ええ、例のお二人さんに対しても……」

そこで、ミスティアはヤツメナギをひっくり返した。木炭にたれと油が垂れたのだから、じゆうじゆうという音がなり、白い煙が沸き上がった。

「思えば、あの時気づいておくべきでした……恋に目覚めた若者が思い詰めると、後先考えない行動に出るといふことに……」

ヤツメウナギにたれをかけ、うちわではたはたと扇ぐミスティアはいつになく遠い目をしているように見えた。

「彼がこつそりお酒に何かを入れていることに気が付いたのは、冬に入つて間もない時期でした。寒風吹きすさぶこの季節、居酒屋は書き入れ時と言つていいでしょう。忙し

さの中で気が付けたのは運が良かったのか悪かったのか……ともあれ、私はすぐにそのお酒を下げ、代わりのものをお客さんに出しました。そして店じまいをした後、彼に問い質したのです」

焼きあがつたヤツメウナギを、ミステリアは二枚の皿に載せて二人の前に置いた。

「なぜあんなことをした、何を入れたのだ、事と次第によっては解雇だけでは済まない、人里の人間にも相談するかも知れない、と少し厳しく詰問しました。彼は暫く黙っていました、やがてぽつりぽつりと話し始めました」

妹紅はけつ、と吐き捨てるような声を上げ、おちよこをぐいと空けた。

「しようもない男だなあ」

「彼が言うには、食材を拾いに竹林の辺りをうろついていたら、永遠亭の兎……ええ、あの『てゐ』に出会ったそうなんです。それで、永遠亭には優れた薬師がいることを思い出して、惚れ薬はないかと尋ねたんだそうです」

「うげえ……薬に頼るとか……それでも男かつての!!」

くだをまく妹紅を、慧音が落ち着かせる。

「まあまあ……それで? どうなったの?」

「それで、『てゐ』に一日だけ待てと言われて翌日渡された薬を、その客の酒にこっそり忍ばせたそう。私が気が付いた時には既に五、六回はやっていたそうです」

「……………」

「それで、効果は出たのかって聞いたら

『全く駄目だった』

と。

『そんなことをしていい訳がない、すぐに薬を渡しなさい、私が処方します』

って、そう伝えたんです。私は彼のことを心配して言った積りだったんですよ。でも、彼は疑わし気な目で私を見て言いました。

『自分で使う気なんですか？』

「はあああ？　ありえねえだろ、そいつ!!」

「ええ……私も余りのことに頭が真っ白になって、何も言い返せませんでした。

『そこまで言うのなら好きになさい、でもここで雇う訳にはいきません』

と言うと、

『お世話になりました』

とだけ言つて帰つてしまいました。その後彼がどうなったのか、暫くは分かりませんでした。事が明らかになったのは、半月ほどして、*“てゐ”*がひよっこり姿を現した時のことです。

*“てゐ”*が

『新しい肉が手に入ったから使ってくれ』

そう言って差し入れをして来たのです。無論代金は払いました。それから、*“てゐ”*はにやにやして私を見ているのです。少し癪に障りましたが、あの青年の事を思い出して*“てゐ”*に尋ねました」

「*“てゐ”*はますますにやけて、こう言いました。

『あいつなら、昨日、死んだよ』

それから*“てゐ”*は、事の経緯を得意げに語りました。なんでも永遠亭から持ち出したのは一種の興奮剤だと言うんです。それも妖怪向けの、強力なもの……。

普通の人間に飲ませると、一種の覚醒剤としても作用するもので、幻覚を伴うのだとか。しかし余りに強力なため最悪の場合、興奮のあまり死に至るのだそうです。

青年はそれをてゐから入手した後、それを思い人の酒に混ぜて飲ませました。しかし効果がでないことにいら立った彼は、『私の思い人は私に惚れるどころか竹林で殺し合えばかり頻繁にするようになった。おまけにそれが店主にばれて首になった、どうしてくれる』、とてゐに食って掛かったそうです……。

青年の言い分は妖怪の私には理解できませんが、人間の世界ではまっとうな理屈なんではないですか？ とまああれ、面倒になった*“てゐ”*は

『それなら自分が飲めばいい、飲んだ状態で相手に会いに行けば相手にもその効果が現

れるよ』

と答えたそうです。

『そんなの嘘に決まっているのにねえ』

てゐるは面白そうに笑いながら言っていましたっけ……。

ともあれ青年は、自らその薬を飲み干しました。そして、彼女の名を呼びながら酩酊状態に陥ったそうです。

先ほども言った通り、薬には幻覚作用もあります。そこで彼の中では色々な情景が繰り広げられたのでしよう、夜明けまでにその場で何度も射精しながら恍惚状態だったそうです。そして、夜明けとともに体力を使い果たしてそのまま死んでしまったのです。妹紅と慧音はここまで来るとさすがに黙り込んでいた。妹紅は心なしか青ざめてい

る。  
「それで、ぴんときた私は尋ねました。『これは何の肉なのか』と。」

「てゐる」は笑っていました。『まあ、ご想像にお任せするよ』とだけ言い残し暢気な顔で去って行きました。さて、ここで私は考えました。

私も当初、彼の働きに助けられたのは事実です。既に解雇したとは言え、彼のたどった顛末は私の監督不行き届きが原因でもあるのです。

彼の叶わなかった恋に、僅かでも応えてあげてもいいのではないか、と思いました。

そこで、私はその肉を使つて煮付けを作つてみました。これが案外好評で、目出度く彼の思い人の腹の中に納まることができましたのです。思えば私も、実に良いことをしました」

沈黙する二人に、ミスティアはいつも通りののにこやかな笑顔で語つた。気のせいだろうか、妹紅には、その瞳が妖しく輝いて見えていた。

「それでも、やはり人間一人が人里からいなくなりました。初めは良いことをしたと思つた私も、人里の店でそれを食べさせたことに、何か筋の通らぬものを感じました。

“けじめ”とでも言うのでしょうか。人間の里では、人間の慣習を尊重するべきです。短い期間とはいえ、私も人間の思考の大体は分かるようになっていましたから、そこで店を畳むことを決心したのです」

瞳から生氣を失くした妹紅が、少し震えを帯びた声で尋ねた。

「なあ……さつきの肉、もしかして……」

「ええ、あれも“てゐ”から買い取りました。何の肉かは敢えて尋ねていません。鳥肉以外で美味しければいいんですから」

凍り付く妹紅と慧音に、ミスティアはにっこり笑いかけた。

永遠亭の姫と何度も殺し合いに興じ、五体がばらばらになつても蘇る妹紅の姿を目にしてからというもの、ミスティアの頭からは妹紅が人間であることがすっぽり抜け落ち

ている。

そして妹紅に宿る不死鳥は、鳥族の妖怪であるミステイアにとって永遠の憧れなのだ。彼女に美味しいと喜んでもらうことは、ミステイアにとって至福の喜びでもあった。

今宵はまだ始まったばかり。涼しい風が辺りをそよいでいった